

衆人羞恥♡性器性感検査
～同級生と幼馴染の前で、
乳首・クリ・手マンで大絶頂&潮吹き
～

1

毎年ある身体検査はただでさえ憂鬱なのに、再検査日を選んだのは、自分で振り返っても非常に間抜けだった。

実験の日程と被っていたから。それだけの理由だった。実験を一度休むより、再検査日に合わせる方がずっと楽だと判断した。

なので今朝、篤に「今日って、男女合同らしいよ」と言われて、意味がわからずパニックになった。

「……え」

「なんか、再検査日だけそういう運用らしくて。知らなかった？」

篤は少し申し訳なさそうな顔をしていた。でもどこか妙な感じがした。言いにくいことを伝える時の、微妙に目が合わない感じ。

「知らなかった」

「そっか……ごめん、もっと早く言えばよかったね」

謝ることじゃない、と思ったけれど、何も言えなかった。

十一月の朝、大学の構内はまだひんやりしていた。保健センターに向かう並木道を、結衣は篤と並んで歩いた。距離は自然に保たれていた。近すぎず、遠すぎず。十六年間、ずっとこうだった。小学校の登校も、中学の帰り道も、今もまったく同じ間隔で歩いている。それが心地よかった。いつもは。

毎年行われるこの身体検査は、性器・性感検査というものが含まれる。結婚可能年齢に達している男女の生殖機能に問題ないか確かめるための検査で全部の男女に義務付けられて

いるが、まともに受けている人はいない。ただし、国立大学に通う学生は税金で学校に通っているため、この検査を受けることが、入学および通学の条件となっている。

結衣は今年2年生で、入学以来、この検査を受けるのは2回目だった。初めての検査は、訳もわからないまま、受けることになり、何がなんだかわからないまま終わってしまったが、2回目となる今回はとても憂鬱だった。

「……理学部の男子、なんで再検査が多いの」

呟くように言った。保健センターの掲示板には再検査者の名前が貼り出されていて、見るともなく眺めていた時に気づいた。知っている名前がやけに多い。

「あー……たぶん、みんな知ってたんだと思う。男女合同になるって」

「え」

「実験と被ったのを口実に再検査日にした人が多いんじゃないかな、って」

結衣は少し立ち止まった。

「意図的に、ってこと」

「……うん、たぶん」

篤は前を向いたまま答えた。結衣は黙って歩き続けた。

そういうことか、と思った。腹が立つより先に、ただ静かに理解した。自分が鈍かっただけで、周りはずっと知っていたのだ。女子の同級生が今日ほとんど来ていないのも、実験をちゃんと優先したからじゃなくて、再検査日を避けたから。理学部の女子は少ない。その少ない中で、結衣だけが何も知らないまま今日ここに来た。

「……篤は」

「うん」

「篤は、それを知ってた？」

少し間があった。

「……昨日、同じ実験班の人から聞いた」

「そっか」

「結衣に言おうか迷ったんだけど、もう日程変えられないし、言っても不安にさせるだけかなって思ってた」

「そうだね」

怒っているわけじゃなかった。篤が気を遣ってくれたのはわかる。でも、知っていたなら言ってほしかった、という気持ちも少しあった。

保健センターの入口が見えてきた。扉の前に数人の男子が固まっていた。理学部の顔見知り。結衣に気づいた一人が、何かを囁いて隣の男子の肘をつついた。

結衣は視線を地面に落とした。

受付を済ませると、更衣室に通された。

再検査の内容は、通常の健診と同じ流れで行われると説明を受けた。身長・体重・視力・聴力・血圧、そして——検査項目の紙を見た瞬間、結衣は一瞬だけ呼吸が止まった。

【性器・性感検査】

と記載がある。

今日は男女合同だと篤は言った。

「……あの」

受付の職員に話しかけた。できるだけ落ち着いた声を出した。

「性感機能検査も、男女一緒の会場でやるんですか」

「はい、本日は再検査日のため合同会場での実施となっております」

「男子の方も、同じ場所で」

「はい。検査技師が順番に担当いたします」

職員は事務的に答えた。悪意はなかった。ただそういう運用だというだけで、結衣の問いに戸惑う様子もなかった。

頭の中はパニックになったが、受付の担当者はさも当たり前のように説明している。去年のことは定かではないが、通常的身體検査のように、パーテーションで区切られた会場だった記憶がある。

パーテーション一枚を隔てただけで、あの、性器・性感検査を受けると思うと億劫だったが、こんなことを恥ずかしいと思う方がおかしい気がした。恥ずかしいと思うほうがつけ込まれる気がして、「こんなこと、なんとも思っていない」という態度を貫こうと決意する。

更衣室に戻り、荷物を棚に置いた。鏡に映った自分の顔を見た。いつもより少し青白かった。

逃げればよかった、と思った。でも今から帰ったら再々検査の日程を組み直して、また来なければならない。それはそれで面倒だった。それに、篤がいる。篤の前でこの程度のことで怖気づきたくなかった。

合同会場は保健センターの奥の大きな部屋だった。

入った瞬間、空気が変わった。

男子が数十人いた。理学部生が多く、結衣の顔を知っている男子がほとんどで、入ってきた瞬間に視線が集まるのがわかった。声が出ないほどではなかったけれど、足が一瞬だけ止まった。

「片山さん来た」

誰かが言った。特に悪意のある声ではなかった。それがかえって嫌だった。

篤は少し離れた場所にいた。視線が合った。篤が何か言いかけたが、口を閉じた。結衣も何も言わなかった。

検査担当の技師が正面に立っていた。

四十代半ばに見える男性だった。白衣を着て、バインダーを持って、結衣のことを一瞥してから手元の書類に目を落とした。

「七番、片山さん」

呼ばれた。

「はい」

「準備ができれば開始します」

それだけだった。

桐島、と名札に書いてあった。表情がほとんどなかった。怒っているわけでも、困っているわけでも、関心があるわけでも恐らくなかった。ただ仕事をしている人間の顔をしていた。

結衣はそれが一番怖かった。

怒鳴ってくる人間でも、笑ってくる人間でも、嫌がらせをしようとしている人間でもない。ただ、自分の仕事をするだけの人間。この人は今日のことを帰りの電車でたぶん一秒も思い出さない。

そういう確信が、根拠もなくあった。

男子たちの話し声が遠くで聞こえていた。篤の気配がどこかにあった。桐島はバインダーに何かを書き込んでいた。

結衣は唇を一度だけ噛んで、深呼吸した。

早く終わらせよう、とだけ思った。

2

「では、身長・体重・視力・聴力・血圧の測定から。測定は下着姿で行います。脱いだものはそこに置いてください」

桐島は無表情にそう言って、壁側の測定器を指さした。男たちから少しはなれた場所だが、それでも視界に入る位置にある。

結衣は一瞬、息が詰まった。

下着姿。あの、男子たちの前で。

(やめて……)

心の奥底で、そんな声が響いた。

でも、口には出せなかった。

桐島はもう測定器の前に立っていた。結衣のことなど気にしていない様子だった。

結衣は、仕方なくゆっくりとパーカーのジッパーを下ろした。中は古いTシャツ。それを脱ぐ。ズボンを脱ぐ。寒気のようなものが背骨を駆け上るのを感じた。

男子たちの視線が背中に突き刺さるのを感じた。

ブラジャーは無地の白。ショーツもシンプルなやつ。特に凝ったところはないはずなのに、なぜか恥ずかしくてたまらなかった。

結衣は腕で胸を隠そうとして、測定器に向かって歩いた。足が震えていた。いつもの自分じゃない。いつもは研究室の試験管を手にする手の方が落ち着いているのに。

「そこの台に乗ってください」

桐島は淡々と指示した。結衣は言われる通りに台に乗った。背筋を伸ばして、姿勢を正そうとした。

男子たちの視線が、自分の胸、お尻、脚、至る所を舐めるように巡っているのを感じた。

「お、まんこの毛はなし？それとも薄い感じ？」

誰かが言った。

「ショーツのラインから見える感じだと、あんまり生えてなさそうだよな」

「意外と白いね」

「片山さんって意外とスタイルいいじゃん」

声は小さいけれど、全て聞こえていた。

結衣は、ただ顔を真っ赤にして、顔を前に向けていた。桐島は計器の目盛りを見て、何かを記録していた。

「身長 158 センチ。体重 47 キロ」

桐島は言った。

視力測定へ。視力検査の機械の前に座ると、目を開けたまま、視線を固定させられた。

視界の隅に、男子たちの姿が見えた。篤もその中にいた。彼は少し下を向いて、何かを見ていた。結衣が気づくと、彼は慌てて視線をそらした。

視力は両目 2.0 だった。いつも通り。聴力も異常なし。

「血圧を測ります」

桐島は血圧計の腕帯を結衣の腕に巻いた。腕を掴まれた瞬間、びくりとした。

腕帯が締め付けられていく。

結衣は、ただ黙って耐えていた。

男子たちの視線が、まだまだ自分の体を舐めていた。胸の膨らみ、お腹の柔らかさ、脚の線。全部見られている。

遠くで男子が声を上げる。

「お前の彼女、グラビアデビューじゃん！」

そう声をかけられた篤は、耳まで真っ赤にしながら、「かつ、彼女じゃないし！」と声を張り上げる。

「いやいや、一緒に保健センター来てる時点で、どう見てもそうだろう」

「安藤、ずっと一緒にいるから気づかないだけで、片山さんって結構美人じゃん」

「でも、あんな地味な服ばかり着てるもんな」

「今日みたいな姿を見せてくれないだけだよ！」

「おいおい、安藤、彼氏として何か言えよ！」

そう男子たちに言われ、篤はさらに顔を赤くし、言葉にならない声を立てていた。

結衣は、耳まで熱くなる。たまに、同じ学部の男子が、篤にそのような揶揄いの文句をかけているのは知っていた。もちろん、男子達は結衣に直接そういうことを言うてはこない。だから結衣は気にしたことがなかった。

ただ、このような場所で、篤の女だと言われながら体を眺め回されるのは、恥ずかしかった。なぜだか、篤にも申し訳なくて、泣きそうになる。

血圧の測定が終わった。

「上の血圧110、下の血圧70」

桐島は淡々と読み上げ、記録した。

「以上で基礎測定は終わりです」

桐島はそう言って、測定器の周りを片付け始めた。

結衣は、すぐに衣服を取りに歩いた。Tシャツを着る。ズボンを穿く。パーカーのジッパーを最後まで上げる。全身を覆う安心感が心地よい。結衣はホッと息をついた。

確実に結衣に聞こえるような声量で誰かが言う。

「おっばい隠すなよ～。見てたのに。」下品な笑いが、空間に起こる。結衣はもう顔を上げられなかった。

「おい安藤、いいなあ、あんなスタイルいい女と付き合って」

「だから彼女じゃねえって言ってんだっ」

篤の声は少し怒っていた。けれど、男子たちの揶揄は止まらない。

「じゃあ、今から付き合えよ！」

「安藤の我慢の限界ももう近いそうだな！」

「毎日、それ見たい気持ちを押し殺して頑張ってるもんな」

「毎日、こっそりオナニーしてるだろ!？」

「違うっ！」

「えらいえらい。毎日オナニーしてるくせに！」

「違うって言ってんだ！」

篤の声が、会場に響いた。みんな、篤の反応を楽しんでいる。

結衣は自分に恥をかかせてしまい申し訳ない気持ちと、それでも面白い男子たちへの怒りがこみ上げてくる。しかし、何も言えず、ただ俯く。

「俺も片山さんのおっぱい揉みて～」

「片山さんってマン毛生えてんの？」

男子達が好き好きに言う。

結衣の目には、もう堪えきれない涙が浮かんで、こぼれ落ちそうだった。下の唇を噛みしめて、こらえる。

桐島がバインダーをめくる音だけが、会場の騒がしさの中で規則正しく響いていた。彼はこの状況に何も感じていないようだった。

男子たちの揶揄はまだ続く。

「おい安藤、見てるだけなんて無駄だぞ。今夜、告白してこいよ」

「毎日、オナニーしてるくせに、言えないとか笑えるんだけど」

「俺が代わりに告白してやろうか？片山さん、俺と付き合ってください！あんたのスタイル最高です！毎日、あんたのためにオナニーしてます！」

「うるさい！」

篤の声が、今度は怒りに満ちていた。男子たちは、一瞬静かになったが、すぐに再び笑い出した。

3

「では、次の検査に移ります。」

桐島の声は、いつものように淡々としていた。

「性器・性感検査です。ブラジャーを外して乳首を出して、そこに座ってください」

桐島は、部屋の中央にある、診察用の椅子を指さした。それは、部屋の隅にあった測定器と比べて、男子たちに近い位置にあった。

男子たちの視線が一斉に、結衣の顔と体に集まった。結衣は、一瞬、息が詰まった。

(やめて……だめだ……)

心の奥底から、悲鳴が上がった。

桐島は、何も感じていない様子で、次の準備を始めていた。

結衣は、ただ立ち尽くしていた。動けなかった。

「……あの」

声にならない声が出た。

桐島が、結衣のほうを振り返った。

「なんでしょう」

「あの……乳首の検査は……男子から見えないところで……できないでしょうか」

桐島は、少し眉をひそめた。結衣の顔を見ていた。

「それは、できません」

「なんで……」

「本日の再検査は、合同会場での実施と決まっています。検査に問題はありません」

「でも、見られてる……」

「男子も同じように検査を受けています。問題ありません」

桐島は、冷たく、そして事務的に答えた。結衣の感情など、彼にとってはどうでもいいことだった。

「お、聞こえてるな。俺たちはただ見てるだけなんだぞ」

男子たちが、また下品な声で言った。彼らは、結衣の懇願が断わられたのを喜んでいるようだった。

(どうしよう……どうしよう……逃げたい……でも、逃げられない……)

結衣は、パニックになっていた。

「下着を着用したままでは、できないでしょうか。」結衣は声を震わせながら懇願する。

「それは無理です。性器の状態を直接観察する必要があるため、全裸になっていただくのが決まりです」

桐島は、結衣の訴えに耳を貸さなかった。彼にとって、それはただのルールだった。

(だめだ……もうだめだ……)

結衣は、絶望した。

「ねえ、早くしないのか？」

「待ってるぜ、見せてくれよ」

「結衣ちゃんのおっぱい見てえ～～」

男子たちが、また催促するように言った。

結衣は動くことができず、その場に立ち尽くす。

桐島は「乳首の検査は、乳首の大きさ、色、形、そして性感を測定するものです。性器の状態を知る上で重要な指標となります。本日は女子はあなただけなので、素早く終わらせて男子の検査に映る必要がありますので、急いでください」と、淡々と結衣を急かした。

「特に乳首の感度を測るための検査では、乳首に直接刺激を与え、反応を観察します。性的な興奮によって乳首が硬化するか、その時の反応の強さなどを記録します。この数値は、性的な成熟度や、性機能に障害がないかの重要な指標となります」

桐島は、まるで商品の説明をするように、淡々とそう言った。

男子達はニヤニヤと結衣を見ている。

「性的な成熟度か～。結衣ちゃんのおっぱいちゃんとビンビンになって、イキまくれるか大事だもんな～。」

「まじ、結衣ちゃん乳首ビンビンにしてるとか、エロすぎてたまらんわ～w」

結衣は、羞恥と惨めさで膝を震わして、唇を噛み締めていた。

「安藤～、お前の彼女の乳首、俺が硬くしてやろうか？」

篤が、ぎゅうと拳を握りしめるのが見えた。

(もう、やめて……もう、やめてほしい……)

結衣は、心の中で叫んだ。

「片山さん、まだですか？」

桐島の声は、冷たかった。結衣は、彼の無表情な顔を見て、恐怖を感じた。この人は、自分の感情など、全く理解してくれない。

ただ、自分の仕事をこなすためだけの人間だ。そのことに気づいた瞬間、結衣は、すべてを諦めた。

結衣は、震える手で、パーカーのジッパーを下ろした。

男子たちの視線が、パーカーの下に隠れた胸に注がれるのを感じた。

「お、やっとか！」

「見せてくれるんだ！」

「乳首見せてくれよ～！」

男子たちの歓声が、結衣の鼓膜に突き刺さる。

結衣は、パーカーを脱いだ。次にTシャツ。

「あ」

誰かの声が、小さく漏れた。

結衣は、Tシャツの裾を掴んで、一瞬ためらった。でも、ためらいは一瞬だけだった。諦めたからだった。

結衣は、Tシャツを脱いだ。部屋の空気が、肌に直接触れる。寒い。

結衣は、自然と腕で胸を隠そうとした。

「腕は下ろしてください。それでは検査ができません」

桐島の声が、冷たく響いた。

結衣は、仕方なく、腕をゆっくりと下ろした。

「お、すげえ…」

「お、思ったより乳首でっか〜。あの乳首だと、ビンビンに硬くなるのが見てみたいわ
W」

「ちょい黒くね？乳首でオナリすぎか？」

「安藤、お前の彼女の乳首も見せてくれるとか、最高にいい女じゃん！お前、毎日、こんな見ながらオナニーしてるん？うらやまし〜」

「違うっ！」篤が、怒りを含んで叫んだ。

篤が、ギュッと歯を食いしばるのが見えた。

結衣は、ただ顔を俯かせ、胸を張って立っていた。

「検査台に座ってください。手を頭の後ろで組んでください」

桐島は、診察用の椅子を指さした。結衣は、言われる通りに、椅子に座った。手を頭の後ろで組むと、胸が、より一層強調される。

「お、すげえ、おっぱい揺れた！」

「見てえ、もっと揺らせ！」

結衣は自分の乳首に、男子達のねっとりした下卑た視線を感じて、乳首の先っぽがピリピリするのを感じた。

(やだ……やめて……見ないで……)

乳首に、室内の微かな風を感じる。

結衣は、涙で潤んでいる視界で、ちらりと男子達の方を見る。

全員がニヤニヤと、そして好奇心を孕んだ目で結衣を、そして結衣の乳首を眺めている。

(みんな……見てる……わたしの……乳首を……)

「ひい……っ♡」

結衣は、真っ赤な顔で口を惚けたように広げた篤と目が合った。

結衣は、ビクンっと体を震わす。

微かな震えで、乳首がほんの少し揺れた。

結衣はその時、幼馴染である篤に裸体を見られた絶望と羞恥の中に、少しだけ快感を感じ、その罪悪感に再び唇を噛んだ。

4

「では、乳首の検査を開始します。まず、乳首の大きさ、色、形を記録します」

桐島は、そう言って、結衣の胸に近づいた。彼は、結衣の乳首を、指で軽くつまんだ。

「ひ` ……あ` ……っ♡」

結衣は、思わず声を漏らした。男の人に乳首を触られるの、初めてだった。桐島の手は、結衣の予想以上に大きく、そして、ずしりと重かった。

(びっくりした…)

結衣に男性経験はない。

彼女の体に男性が触れたことはほとんどなく、ましてや乳首に触れる男性は、桐島の手が初めてだった。

「お、声出した！」

「乳首触られただけで、感じてんじゃんw」

「安藤、お前の彼女、すげえ敏感じゃん！いいなあ、毎日あんな声聞きながらオナニーしたいっ！」

結衣の視界が、男子たちの下品な笑顔と、桐島の無表情な顔で埋め尽くされた。

「乳首の色はカラスケールで、8レベル目。少々、色味が濃いめですね。」

桐島は淡々と読み上げる。

結衣は、カッと顔を熱くした。